

歴史地理学会運営二〇年の回顧

中 田 栄 一

一

歴史地理学会は、昭和五二年度をもって創立二〇周年を迎え、広島大学文学部において開催した第二〇回大会でさやかな記念行事を行ない、また第二〇回大会の共同課題「村落の歴史地理」を中心に、さらに「再び本質と方法」の特集を加えて、歴史地理学紀要第二〇集を昭和五三年度に発行した。大会は、昭和三三年四月二十九日に日本大学で開催した第一回大会から二〇回目にあたり、紀要は、昭和三四年四月に発行した第一集「歴史地理学の本質と方法」以来二〇集目にあたる。

会員数も、創立二年目にあたる昭和三五年三月末には一七九名であったが、今や五六五名となつて、六〇〇名を越えるのも目前となつた。特に若い新入会員の多いことは慶ばしい。そして、地理学の専攻者ばかりでなく、歴史学者をはじめ、宗教学、言語学、気象学の専攻者など幅広い会員を擁し、歴史地理学の学界における意義の強調にいさゝか貢献しているともいえるであろう。昭和三四年六月一五日に発行された会員通信第一号は、ガリ版刷り、藁半紙一枚の表二頁のものであったが、本号をもって一〇〇〇号を迎え、記念号を特集することになった。「会員通信」を「歴史地理学会会報」に改

称したのは昭和四九年四月、そして五〇年五月刊行の第七九号から現在のよな学会誌に改めた。昭和五〇年一月二十九日には学術刊行物に指定され、八三号より学術刊行物として発送することになった。年額四〇〇〇円の会費で、春に総会・大会を開催、年五回以上の例会を開き、三〇〇頁程度の紀要を刊行し、三〇〇頁程度の会報を年六回、確実に発行する。学会としては精一杯の活動であるといえる。

昭和三三年、現会長である菊地利夫氏の提唱により、集つた少数の有志によつて同好会、日本歴史地理学研究会として発足した本会は、四月に日本大学で第一回大会を開き、七月に簡単な会則を設けて役員を選出、九月二〇日に茗溪会館で第一回常任委員会を開催、菊地利夫常任委員長（当時の会則では会長は設けられておらず、常任委員長が最高責任者であった。昭和四一年、会則を改正、会名を歴史地理学会に改めるとともに会長を置いた。そして、昭和三七年から菊地利氏に代わり常任委員長だった浅香幸雄氏が会長兼常任委員長に就任した。）を選出、一月二十九日に立教大学の会議室で第一回例会を開き、例会後の常任委員会において、事務所を立教大学文学部地理学研究室に置くことに決定（それまでは、提唱者菊地利夫氏宅で事務がとられていた）し、以来、今春、専修大学文学部地理学研究室へ事務所を移すまで二〇年に亘り、立教大学文学部に勤める私が、実質的に庶務・会計事務を担当してきた。

二

事務所（本部）を立教大学文学部地理学研究室に置くことになつ

たのは、一つには、それまで菊地利夫氏の私宅に置かれていて奥様が事務を執って居られる形は、これから発展させようとする学会としてはあまりふさわしいものではなからうということ、次に、立教大学が東京の池袋にあつて比較的交通の便がよく、諸会合に好都合であつたことである。そして私が事務所を引き受けたのは、立教大学文学部の地理学教室の発展にとつて、いろいろな意味において、何らかのプラスになるのではないかと考えたことである。しかし実際に事務所をあずかつてみると、さまざまな厄介な問題が統々と生じてきた。

まず、会則に基づき役員が選出されると、事務所を引き受けているために、私が庶務・会計を担当せざるをえなくなった。当時の会則では、現在の会則のような運営委員制度はなく（運営委員は此の度の新会則からはじめて設けられたものであつて、それまでの役員は、会長、常任委員長、常任委員、評議員、会計監査であつた）、もっぱら運営の都合からの常任委員の増員という形で実質上の事務運営が行なわれていた。すなわち、選出された九名の常任委員が常任委員長を互選し、さらに、運営のために必要な常任委員を若干名増員するべく適任者を推薦し、評議員会と総会に諮つて決定するという形である。

さて、このような形で決つた常任委員のうち一名が責任者となり各部門の事務を進めるのであるが、庶務・会計は實際上、会運営の雑務を一手に引き受けざるをえないことになつた。会費の出納、支出、督促、諸会計の立案から決算、寄贈文献の受領、整理と管理、紀要、会員通信の発送、会員通信の編集、特別委員会の（選挙管理

委員会や財政検討委員会など）組織や事務、役員会の世話等々、会運営に必要な台所の一切をやらざるをえないことになつた。このような面倒で繁忙な事務を毎週、役員が交替で事務所に通つて執るという方法も実施してみたが、交通費もろくにさせぬ会財政では實際上困難である。学生アルバイトを使つてみたが、学生は会運営に理解がなく、しかも絶えず交替するために習熟を期待できぬ。せいぜい、紀要や会員通信の発送事務のような労力のみである。そして何よりも、頼む側として、自らそのような事務をとりながら妙な言い方ではあるが、プライドをもつ役員の学者先生や学習・研究に精を出すべき、また精を出すべく指導している学生に、このような雑務を頼むことは耐え難いことであつた。

元来、このような雑務は会専任の職員（事務員）に任せた方が能率も上り運営に好都合な筈である。しかし、小学会の貧弱な会財政では到底、専任職員を雇えるものではない。専任事務員を一名でも雇うとすれば、会費を倍に値上げしても足りない。雑務処理のために会費を倍以上に増額することは、いかに歴史地理学会の熱心な会員でも賛意を得ることは極めて困難であり、そのような費用はむしろ紀要の充実や研究発表会の開催などの学会本来の活動面にあてられるべきものである。幸い、小さな学会であるだけに、大学会程事務量は多くないので、何とか役員の手だけで運営できる。しかし、庶務・会計事務は常時、何らかの形で存在する。会費の納入も、おもに年度始めに多いが、また年間を通じても続く。寄贈文献や入退会手続も年間を通じてある。かくて、大学会では事務職員に任じられる雑務の一切を、わが学会では常任委員自らが、しかも事務所の

ある大学の常勤の教員が主として担当しなければならぬことになる。この点、事務所を担当するのは、歴史地理学会の会員の多い機関が適当であろう。しかし、立教大学は発展途上にあつて、スタッフは多くない。それに、もつと重大なのは雑務の内容である。

紀要、会報などの編集や大会・例会などの学術本来の運営面ならともかく、一般事務職員に任せただ方がよい庶務・会計事務は、元来、大学教員や学者のやるべき仕事ではない。殊に、私立大学は国・公立の大学に比べ教員の担当科目や時間数も多く、また委員会その他の雑務も多い。私も立教大学の一教員として、研究・教育上の任務がある。その上に、歴史地理学会のこのような雑務をどのようにこなしていくか。本来やるべきことではないのにやらざるをえない。厭うべきことであるのにやらねばならない。このような矛盾と悩みは、とくに発展途上の小学会における庶務・会計事務担当の会員・役員に共通したものであるように思う。

三

庶務・会計事務は現実的には、いかなる学会でも運営の基礎であつて、これを欠いては学会は存立し得ない。専任の事務職員を雇うことのできぬ小学会では、少くとも雇うことが出来るように発展するまでは、会員の誰かが担当しなければならない。そしてまた、たとえ大学会に発展しても、庶務・会計事務の管理は一般事務職員に任すことはできず、会員の誰かが行わざるをえない。学問研究を目的として参加している会員にとつては、これは厭うべきことであり、ことに研究者としてのプライドをもつ者にとつては耐え難いことで

もあろう。しかし、これなくしては運営できず、学会も存立し得ない。もちろん私は、事務を好んで学会の庶務・会計を担当した訳ではない。若し、事務を好むものであるなら、研究・教育の途に入らず、会社や銀行に勤務して、実業界などで活動していたであらう。卒直に云つて、私は事務的能力はほとんどないと自認している。長く本会の運営に當つて来られた役員諸氏も御承知であるように、会計事務にしても、全く簿記の知識のない素人のどんぶり勘定である。庶務にしても適切な処置を欠き、各方面に迷惑をかけること屢々である。實際上、多忙な研究・教育生活の中にあつて、帳簿をこまめにつけ、適切な運営を行うことは極めて困難である。会員に対してお詫びせねばならないような失退は数限りないが、鷹揚な会員諸氏はあまり叱責追及されることもない。だからといつて、事務を怠ると、学会はとんでもない方向に走り出して会の命運にもかかわるような事態に陥り、やがては自らにも後始末の災厄がかかつてくることにもなりかねない。進行は緩慢であるが、一事もおろそかにできず、たえず注意し緊張していなければならない。

このような事務を、矛盾に悩みながら、二〇年に亘つて執つてきたが、この間にあつて痛感したのは、会員、役員相互の理解と協力である。会員・役員諸氏の理解と協力なくしては、このような運営は執れるものではない。この相互の理解と協力こそ、学会の運営と発展にとつて欠くことのできぬ要件である。個人的な荣誉や利益を求めたり、私的な感情で運営にあたるに至つては言語道断であつて、会の発展はおろか維持すら困難になる。遠路もいとわず委員会に集まられ、あるいは紀要や会報などの発送事務に協力された役

員諸氏の理解と協力こそ、本会を今日あらしめた原動力であつたと申しても過言ではない。不器用に素人くさい事務を執る私を、たえず理解と同情で支えられ、温い言葉で激励された会員や役員の方諸先輩あつてこそ、自ら鞭打つて事務を続ける気持ちにもなつたのである。

そして、とりわけ本会の基礎の確立と発展に大きな力となつたのは、浅香幸雄氏のお世話で、畠山文化財団から若干の助成を得たことである。金額としてはそれ程大きなものではなかつたが、本会のような小さな財政規模の学会運営にとつては、実に大きな力となるものであつた。形式上は一応研究助成であつたが、紀要の出版費にその大部分をあてざるをえぬ本会の財政では、当然、出版費の一部とせざるをえなかつた。紀要の刊行後において、印刷会社からの請求に応じなければならぬ時点では、会費の納入は未だ十分に進まず、どうしても、運転資金として若干の財源が必要であつた。会運営を円滑にし、財政的基礎を確立するために、私はこの助成金を運転資金として別途に確保することにした。この資金のおかげで、会の運営は財政的に円滑になり、石油ショックに際し、印刷会社から印刷費の前納を請求されたときも、難なく乗り越えることができた。この点、畠山文化財団やお世話いただいた浅香氏に心から感謝の意を表したい。財政的には、本会の発展を今日あらしめたものは、全くこの助成によるものであることを銘記したい。そして、このような内外の理解と協力こそ、本会の発展をもたらしたものであることを、ここに協調して置きたい。

四

日本歴史地理学研究会が発足して二、三年経つた頃、ある有力な会員からしばしば、「まだ潰れないか」とひやかされるようになった。第二次世界大戦後のわが国において、小さな学会が新しく発足してはうたかたの如く消え去つて行つた過程からみれば、このような小さな同好会が存続することはむしろ不思議なことであつたようである。まだ潰れないかといわれる慶びに潰してなるものかと反発し、なぜ潰してはならないのかと自ら反問した。また、日本地理学介の某有力者（現在、日本地理学会の名譽会員である）から「分派活動だ」と決めつけられたこともあつた。分派活動と決めつけられると、改めて日本歴史地理学研究会の創設と存立の意義、とくにわが国の地理学界のあり方、学会のもち方、とくに日本歴史地理学研究会の学界、地理学界における意義について考えさせられた。

なるほど一国における学会は、夫々の学問の専門領域において夫々一学会だけでよいのかもしれない。夫々の学問の専攻者が協力して唯一つの学会を組織し、その発展をはかればよいのかもしれない。しかし学問の世界はあくまで自由であり、それぞれの主義主張の上から立つて学会が組織され、多様性をもち内容豊かに学問の発展がはかられてよいのではないか。学問の統制こそ厳に避けられるべきものであろう。また、広い領域をもつ学問においては、夫々の専門分野において学会が組織され、その学問全体の発展に貢献できればよい。唯一つの学会であれば自ら研究発表の機会も制限され、ややもすれば学風の単一化に傾き、学問の発展にとつて好ましくならざる傾向も現われかねないであろう。「分派活動」という言葉の裏に、どこか

かに学問統制の臭いもしないでもない。このような意味で、私は地理学における歴史地理学の意義や重要性を考え、日本地理学会や歴史学の諸学会とは別に歴史地理学会の存立の意義を認め、その発展をはかるべきであると考えたのである。

私はすでに歴史地理学紀要二〇集に掲載された拙稿において、歴史地理学の地理学において占める地位、意義などについて若干ふれているが、私は地理学、とくに人文地理学においては、歴史地理学はその一分野を形成するとともに、欠くべからざる研究操作、研究方法であると考えている。斯く述べながらも、私自身、実は人文地理学における興味を中心は歴史地理学とは別のところにある。しかし、人文地理学にとっては、何らかの形や程度において、歴史地理学的研究方法は必須のものであることを痛感している。極言すれば、歴史地理学的研究操作を伴わない人文地理学研究は、本質的にも欠陥のあるものであると思う。それは、日本の人文地理学は元来歴史地理学の基礎の上に展開してきたものであるというたんなる歴史的、伝統的な経緯からいうのではない。本質論的にも方法的にも必須のものであると強調する必要がある。そして歴史地理学の分野は、歴史学や他の隣接科学の成果や方法とも関連をもっている。このように歴史地理学の学問における、また地理学における意義を認識するがゆえに、一つの独立した学会としての存立の意義を認めたいのである。本会の提唱者である菊地利夫氏の呼びかけに応じ、学会の設立や運営、発展に協力してきたのも、全くそのような意味においてであった。

五

庶務・会計の事務は、学問の研究やその発展・普及を目標とする学会の運営にとってはその基礎をなすものであって、これをおろそかにしてはその主目標も果し得ないものである。したがって、歴史地理学の研究とその発展を願う者は、当然ながら、その基礎を確立するべく努めることが必要である。そして学会の運営に当る者はすべて、各運営部門の意義、任務を理解し、互に協力一致して、学会の主目標を目指し努力することが必要である。私は、歴史地理学の学問における、地理学や歴史学におけるその意義を痛感し、その発展を希望するがゆえに、二〇年に亘って雑務を担当してきたのである。そしてその支えになったのは、いうまでもなく、会員や役員諸氏の理解と協力であった。

学会はある程度発展すると、当然規模も大きくなり、伝統が形成されるとともにその内容にも多様性が生じ複雑化する。それとともに学会の運営面にもさまざまな問題点や困難な事情も生じてくる。しかし、たとえどのように発展しても、学会運営にとって欠くことのできぬ要件は、極力その形骸化を避け、内容の充実をはかるべく努めることである。これを果たすための唯一の途は、会員・役員が歴史地理学の真の意義を正しく、広く理解し、協力一致して、自由に、そして多方面にその発展、普及をはかるべく努力することである。創立二〇周年を迎え、会報も一〇〇号の刊行を達成したわが歴史地理学会の、今後のいつそその発展を祈ってやまない。

(昭和四九一五二年度 常任委員長 立教大学文学部教授)